鳥取県立厚生病院
Tottori Prefectural Kousei Hospital

第66号 広報 すずかけ

R8.11

すずかけQR

いのちをつなぐ、このまちで



特集

専門家の関わりとその思い

「お産のかたち」

contents

Topics01 安心を届けるために、病棟でインカムの試験導入を開始
インカム、導入しました

Topics02 看護学生実習 Caring Hearts, Guiding Hands
未来の看護師を育む

連載Vol.2「心に響く本 」
ちいさなあなたへ

お知らせ 新職員紹介、鳥取県がんフォーラムの開催

創立 鳥取県立 96th 厚生病院
since1930 Tottori Prefectural Kousei Hospital



「会いたかった」を、伝える日まで。

「お産の かたち」

助産師

継続的なケア、分娩介助、
保健指導、精神的サポート

産婦人科医

妊娠・分娩の医学的管理
帝王切開、処置



妊娠・出産は、女性にとって人生の大きな節目であり、喜びや期待に満ちたかけがえのない時間です。その一方で、身体や心の変化、出産への不安、ご家族のことなど、さまざまな思いを抱かれることもあるかと思います。当院では、妊婦の皆さまが安心して妊娠期間を過ごし、健やかに出産の日を迎えられるよう、産婦人科をはじめ、小児科、麻酔科、その他各診療科や関連部門が連携し、病院全体で皆さまを支える体制を整えております。私たちが大切にしているのは、医療の安全と質の向上はもちろんのこと、お一人おひとりの思いや希望に寄り添い、妊婦の皆さまとご家族に安心と信頼を感じていただける医療を提供することです。新しい命の誕生は、ご家族にとって大きな喜びであると同時に、地域社会にとってもかけがえのない希望です。私たちは、その尊い瞬間に立ち会えることに誇りと責任を感じています。妊娠中の小さな心配事も、どうぞ遠慮なく私たちにご相談ください。
皆さまと赤ちゃんが健やかに過ごされ、笑顔で出産の日を迎えられますよう、病院スタッフ一同、心を込めてサポートしてまいります。

ものとなりますことを心よりお祈り申し上げます。

病院長　齊藤博昭

麻酔科医

無痛分娩管理、緊急時対応
帝王切開時の麻酔管理



小児科医

出生直後の新生児管理・蘇生
新生児の健康チェック

November 2026 ISSUE Vol.66

助産師 #ウェルカム



病棟看護師長兼助産師
小林 明子（こばやし あきこ）

病棟副看護師長兼助産師
鋤崎 けい子（すきざき）

Key Word

「ウェルカム」の心で、一人ひとりの物語に寄り添う

新しい命が誕生する瞬間。そのかけがえのない時間を、お母さんと赤ちゃんの一番近くで支える助産師たち。今回は、小林師長と鋤崎副師長に、日々のケアで大切にしていることや、出産に寄せる想い、そして多職種との連携についてお話を伺いました。

―今回、非常に温かいメッセージをキーワードとして掲げられました。普段、患者さんと向き合う上で、どのようなケアを大切にされているのか教えてください。

小林師長（以下、小林）　まずは、話を聞くことですね。廊下ですれ違うときなど、日常の何気ない場面をきっかけに、こちらから声をかけることを大切にしています。そうした関わりを重ねながら、お母さんが安心して気持ちを話せる関係を築いていきたいと思っています。

出産後も、赤ちゃんだけでなく、お母さん自身の心や体の様子に目を向けています。特に気にかけているのは、自分からなかなか悩みを話せない方です。

お母さんが持つ力を引き出したい

―助産師として、大切にしている想いについてお聞かせください。

小林：妊娠や出産は病気ではありません。もちろんリスクがある場合もありますが、お母さん自身が持っている力を引き出していく、そして信頼関係を築いて関係性を作っていくことが大切なんです。助産師は、その人自身の様々な背景を見て寄り添っていく。「人」に関わる仕事だと思っています。まずは安心してもらうこと。それが私たちの役割だと思います。

鋤崎：私も、その人の中にある力を引き出したいという気持ちがあります。お産や母になるということは、その人の驚くほどの力を感じることがあります。その姿も含めて、その人らしさを大切にしたいですね。お産のときに一生懸命だったことを、自分でほめてほしい。その母になった瞬間を支えたいと思っています。



チームで紡ぐ、安心と信頼の「つなぐ医療」



※ご家族のプライバシー保護のため、本写真の無断転載・SNS等への投稿は固くお断りいたします。

―表情やちょっとした変化から、その方の想いをくみ取り、妊娠中からの関わりやスタッフ間の情報共有を通して、必要な支援につなげています。

鋤崎副師長（以下、鋤崎）　私たちにとって、じっくり話を聞くことは自然に身についていることなのかもしれません。助産師は、お産のときに長時間そばに寄り添うこともあります。相手の話を聞き、その人が何を感じ、何を必要としているのかを考えることを大切にしています。

―多職種で連携するうえで、大切にしていることについてお聞かせください。

小林：情報共有はもちろんですが、助産師はお母さんの代弁者でもあると思っています。先生や保健師さんには直接伝えられない気持ちでも、私たちには話してくださることがあります。その想いを必要な人につなぎ、退院後も安心して地域で暮らしていけるようにすることが大切です。お産は、人生の中では限られた時間ですが、その経験は一生心に残る大きな出来事です。そこに立ち会った助産師は、お母さんにとって特別な存在になることがあります。だからこそ話してくださる想いを受け止め、その信頼関係を大切にしながら、次の支援につなげていきたいと思っています。

鋤崎：私も、同じような思いを共感していますし、短い関わりの中でも多くの想いを知ることができます。その信頼関係を大切にしながら、必要な支援につなげていくことが重要だと思っています。

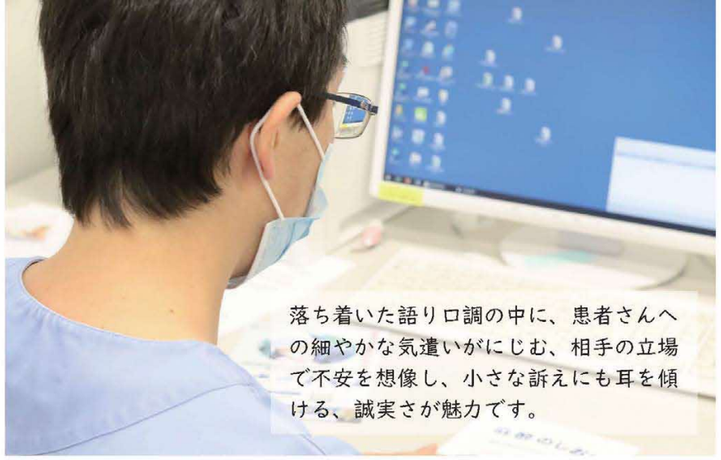
すべての出会いに、ありがとう

―最後に、これから出産を迎える方やご家族へメッセージをお願いします。

小林：私が大切にしていることは『一つひとつの出会い』です。一緒に働く仲間とみなさんで、一つひとつの出会いを大切にしたいと思っています。出産という人生の大切な時間に関わらせていただけることは、本当にありがたいことです。私たちを選んでくださってありがとう。そんな気持ちを忘れずにいたいですね。

鋤崎：妊婦さんだけでなく、ご家族も含めて支えていきたいと思っています。すべての希望に応えられるとは限りませんが、一人ひとりの想いを大切にしながら、一緒に考えていきたいです。安心して出産を迎えていただけるよう私たちも精いっぱい寄り添っていきたいと思います。

November 2026 ISSUE Vol.66



落ち着いた語り口調の中に、患者さんへの細やかな気遣いがにじむ、相手の立場で不安を想像し、小さな訴えにも耳を傾ける、誠実さが魅力です。

#確かな安全を

麻酔科医
藤井　勇雄
ふじい　いさお

―出産に関わる麻酔医として、大切にしていることを教えてください―

藤井先生（以下、藤井）：まずは、安全で安心できる麻酔を提供することです。妊娠中は体が変化し、妊娠していないときに比べて、背中から行う麻酔が効きやすくなるため、薬の量や麻酔の効き方に注意しています。モニターの数値を確認するだけでなく、ご本人にもこまめに声をかけて、体調の変化を確かめています。

―ご本人への声かけには、どのような意味があるのでしょうか―

藤井：モニターに変化が表れるより、ご本人が異変を感じる方が早いこともあるんです。例えば、血圧を測る間隔の合間に変化が起これば、「気持ちが悪い」「吐き気がする」といった言葉が、気づくきっかけになります。

そうした変化にすぐ対応できるよう、繰り返し確認しています。何度も質問するのは、安全に麻酔を進めるためでもあるんです。

―麻酔を受ける方の不安には、どのように対応されていますか―

藤井：突然、下半身の感覚がなくなったり、体が動かなくなったりすれば、怖いと思います。薬を入れたあとに気分が悪くなれば、「何か悪いことが起きているのでは」と不安にもなりますよね。

ですから、想像できることは事前に説明し、麻酔中もその都度お伝えするようにしています。これまで患者さんからいただいた質問や、「そういうことが気になるのか」と気づいたことも、説明に取り入れています。

―出産の場面では、お母さんと赤ちゃん、それぞれへの対応が必要になりますね。

藤井：そうですね。赤ちゃんに対応が必要なときでも、お母さんの手術や全身の管理を止めるわけにはいきません。小児科の先生に赤ちゃんを診てもらいながら、こちらはお母さんの状態を確認する。それぞれができることを、できる限り行います。お母さんが赤ちゃんを心配されていれば、「先生たちがしっかり対応していますよ」と声をかけ、安心していただけるようにすることも大切です。

―これまでのお産で、心に残っていることはありますか―

藤井：いろいろな場面があるので、一つには絞れませんね。ただ、とても大きな声で元気に泣いた赤ちゃんがいて、その声がおなかに響いたことは、今でも覚えています。

―最後に、妊婦さんとご家族へメッセージをお願いします―

藤井：気になることは、どんなことでも言葉にして教えてください。こちらが「きっとこうだろう」と考えて対応するのと、ご本人から聞いて対応するのとでは違います。不安なことや体調の変化など、遠慮なく伝えていただければ、できる限り対応します。安心して麻酔を受けていただけるよう努めています





気さくで、飾らない
何でも話せる親しみやすさと、
小さな不安でも受け止める温かさが魅力です。

#天職calling

産婦人科医
砂流　奈津実
すながれ　なつみ

―妊婦さんと関わるうえで、大切にしていることは何ですか―

砂流先生（以下、砂流）：できるだけ壁をつくらず、話しやすい距離感で接することです。医師として信頼していただきたいのはもちろんですが、妊婦さんは安心を求めて来られることも多いと思うので、気軽に相談できる存在でいたいですね。

特に意識しているのは、エコー中の会話です。向かい合って座ると改まってしまっても、一緒に画面を見ながらなら話しやすいことがあります。「家で上の子を育てるのが大変で」といったひとことから、生活や困りごとが見えてくることもあるんです。

私自身、おしゃべりが好きで、以前はお話が長くなり、ほかの方をお待たせしてしまうこともありました。それで、エコーをしながらお話しするようにしたんです。会話を大切にしつつ、診察も円滑に進めたいと思っています。

―不安を抱えている方には、どのように対応されていますか―

砂流：質問をメモして来られた方には、一つずつ誠実に答えることを大切にしています。一方で、ご自身でも何が不安なのか分からない方もいらっしゃいます。そういうときは、会話の中で「一番気になっていることは何だろう」と探りながら、不安を一つずつ整理していきます。口数が少ない方には、正直、どうしようかなと思うこともあります。会話で打ち解けるという、自分の得意な方法が使えないわけですから。そんなときは、必要な説明や、その方が聞きたいであろうことを選んでお伝えします。

無理に距離を縮めず、まず信頼していただきたいと思っています。

―院内や地域との連携で、大切にしていることを教えてください―

砂流：助けが必要なとき以外のつながりです。普段から声をかけ合い、協力していただいたら「その後、こうなりました」と報告する。その積み重ねが、いざというときに助け合える関係につながると思います。



院内では月に一度、産婦人科や小児科の医師、看護師・助産師が集まり、情報共有や意見交換をしています。職種を問わず、よりよいお産のために話し合える場があるのはありがたいですね。地域の先生方にも、ご紹介いただいたら、できるだけ早く、丁寧にお返事をするようにしています。

「また相談しよう」と思っていただける窓口でありたいです。経験を急に増やすことはできませんが、誠実さや対応の早さは大切にできます。フットワーク軽く動きたいですね。

―特に心に残っているお産はありますか―

砂流：専攻医一年目に、初めて一人でお産を担当した日が、自分の誕生日だったんです。自分が生まれた日に、新しい命の誕生に関われた。朝日が差していて、きれいだったことも覚えています。

健診から診ていた方のお産も心に残っています。陣痛でつらそうだった方が、私を見てにこっと笑い、「先生に取り上げてもらいたいと思っていた」と言ってくださったんです。本当にうれしくて、「そんなに喜んでくださるなら頑張ります」と思いました。やっぱり心に残るのは、その方とのつながりや言葉ですね。

―ご家族も含め、チームで支えているのですね―

砂流：はい。健診にご家族が来られたときには、一緒にエコーを見てもらい、赤ちゃんの存在を実感していただけたらと思っています。

そして、出産後の暮らしまで見据えるには、助産師さんたちの力が欠かせません。誰と暮らしているのか、どんな支援が必要なのか。家庭の状況を丁寧に聞いて共有してくれるので、私たちも一緒に対策を考えられます。本当に、助産師さんさまさまです。

私自身も、困ったときに相談できる先生方に支えられています。だからご本人にも「どんどん質問してください」と言えるんです。お産はいつ始まるか分からず、誰が担当するかも決まっていません。一人ではなく、チームでスクラムを組んで支えることが大切だと思っています。

―最後に、妊婦さんとご家族へメッセージをお願いします―

砂流：「こんな小さなことを聞いていいのかな」と遠慮せず、気づいたことは何でも教えてください。重大なことかどうかは、私たちが判断します。そのための診察ですから。

「時間がかかってごめんなさい」と言われることもありますが、それが診察です。どんどん聞いてほしいですね。

うまくいったら一緒に喜び、うまくいかなければ、よい方法がないか一緒に考える。そんな、隣を走る「伴走者」のような存在でありたいと思っています。

#エレガント

小児科医
橋田 祐一郎
はしだ　ゆういちろう

赤ちゃんに最善を尽くす「エレガントな医療」が信条。
的確な判断でチームを導き、家族には前を向ける言葉を。
きっぱりとした言葉の奥に、最後まで向き合う誠実さが魅力です。



― 診療で大切にしていることを教えてください ―

橋田：まずは、赤ちゃんにベストな医療を尽くすことです。特に生まれてすぐの緊急の場面では、医療者が専門家として、やるべきことを確実に行う必要があります。

私がよく言うのは「エレガントな医療」。無駄がなく、スマートで、きれいな医療をすることが、自分の中の大前提です。そのうえで、お母さんやご家族のお話を聞き、一緒に進んでいきます。

― ご家族に説明するときは、どんなことを意識されていますか ―

橋田：質問には、簡潔に、明確に答えることです。回りくどくせず、現状をはっきり伝えるようにしています。

ただ、厳しいお話をした場合でも、治療によってその先が見えているときには、最後は前向きな言葉で締めくくります。「今はしんどいけれど、一緒に乗り越えていきましょう」と。一緒に前に進んでいく、という気持ちです。

― 現状だけでなく、その先の見通しも伝えるのですね ―

橋田：例えば、心臓の病気について初めて説明すると、お母さんが泣かれることもあります。でも、治療後の生活を見据えられる場合には、そこまで含めてお伝えします。

次の外来では「これからどうしたらいいですか」と、前を向いて質問されるお母さんも多いんです。その姿に、お母さんの強さを感じますし、私もその疑問にしっかり応えていきたいと思います。

― 医師の言葉が持つ力も、大切にされているのですね ―

橋田：自分が患者の立場になると、医師の一言がどれほど大きいかを感じます。ドキドキしながら聞きますし、言葉が強く心に残ります。

だからこそ、伝えるべきことは明確に伝えながら、最後には前を向ける言葉を届けたい。自分が思っている以上に、患者さんには響いていると思うので、言葉は大切にしています。

― 看護師や助産師など、ほかの職種との役割分担は、どう考えていらっしゃいますか ―

橋田：それぞれに役割があると思っています。看護師さんや助産師さんが、ご家族と一緒に説明を聞き、気持ちを支えてくれる。
その中で私は、医師として専門的な疑問に答え、治療について判断し、やるべきことをとことんやる。その役割を大切にしています。

― チームで医療を進めるうえで、大切にしていることは何ですか ―

橋田：医師として「決断すること」です。難しいケースでは、いろいろな意見や選択肢が出てきます。
話し合ったけれど何も決まらなかったということにならないよう、意見をまとめて、その時点での方針を決め、前に進めることを意識しています。

その判断の軸は、赤ちゃん、お母さん、ご家族にとって何が一番よいか、ということです。
まずそこから考えて、実現するために何が必要かを話し合います。

― 経験を重ねる中で、その考え方になったのでしょうか ―

橋田：年齢を重ねるにつれて、余分なものが減ってきたのかもしれません。目的をはっきりさせれば、それに向かって何をすべきかが見えてきます。患者さんとご家族のことを一番に考え、そのうえでベストな方法を決断する。そう考えるようになって、自分自身も楽になりました。ただ、決めるからには、自分もきちんとやらなければいけないと思っています。



― これまで、苦しさを感じたのはどのようなときですか ―

橋田：治療法があって、やるべきことがある場合は、忙しくても取り組めます。苦しいのは、治療の手段がなく、何をしてあげればよいのか分からないときです。

大学病院にいた頃には、そうした子どもたちを受け持つこともありました。答えがなく、先が見えない中で、ご家族と向き合うことに苦しさを感じていました。

― そうしたときは、どのように関わっていたのでしょうか ―

橋田：とにかく、病室に行くことです。何か治療ができるわけでも、よい言葉をかけられるわけでもない。
それでも、逃げずに会いに行く。

行きづらくなって、足が遠のいてしまいそうなときこそ、行くことが大切だと思います。顔を合わせて話し続ける中で、その子にとって何がよいのかを、ご家族と一緒に考えていくんです。

― 先生にとっての「寄り添う」ということが、そこにあるのですね ―

橋田：話しながら、自分でもそう思いました。治療を進められるときには、医師が専門家として判断し、導いていく役割があります。でも、治すことが難しい段階では、医師だけで答えを出せません。ご家族の側に立ち、一緒に考えながら決めていく。自分にとっての「寄り添う」は、そういう場面にあるのかもしれません。

― 患者さんやご家族へ、メッセージをお願いします ―

橋田：ベストな医療を提供します。
無駄のない、エレガントな医療を届けられるように頑張ります。プロである以上、そこは大切にしたいですね。



心に響く本 vol.2



ちいさなあなたへ
アリスン・マギー著
主婦の友社

小さなあかちゃんだった『あなた』が成長し、いつか自分の道を歩んでいく―。
初めて抱いた日のぬくもり、成長していく喜び、そして少しずつ親の手を離れていく寂しさ。
子どもと過ごす一日一日が、かけがえのない時間なのだと気づかせてくれます。
『産まれてきてくれて、ありがとう』
そんな想いがあふれる一冊です。　広報担当　米原　裕美子

■『ちいさなあなたへ』

うるさい。すぐ泣く。すぐさわぐ。

これは、私が出産するまで子どもに対して思っていたことです。

私は、自分の娘を出産するまで、子どもが嫌いでした。当時、私は親戚の中でも歳が一番若く、周りに自分より下の年齢の子はいませんでした。そのこともあってか幼い子の関わり方もわからず、子どもに対してあまりいい印象を持つことなく大人になりました。以前に、働いていた救急や集中治療室では、成人だけでなく小児患者も診ていましたが、そのときは子どもがかわいいと思えたものの、仕事が終わり現場から離れると、やはり親しみを持つことができませんでした。そんな自分が親になるとも思っておらず、もちろん「出産」や「子育て」という言葉からは無縁だと思っていました。

■『ちいさなあなたへ』との出会い

妊娠して初めて気づきました。成長のスピードの早さに。

健診へ行くたびにどんどん成長していくエコー写真の中の赤ちゃん。恐らくほとんどの方は産まれてくるのが楽しみ！早く会いたい！などと思われるのでしょうが、私は産まれてくるまで実感が沸かず、本当に私は妊娠しているのだろうか、本当に産まれてくるのだろうか、本当に母親になるのだろうか、とずっと考えていました。そんな時に、友人が本を勧めてくれました。それが『ちいさなあなたへ』でした。私は本を購入してから読むことなく、ずっと保管していました。

そして、出産のときを迎え、湯気の立つ我が子を抱いた時、「愛おしい」という言葉の意味、重みを初めて感じました。また、目に入れても痛くないという表現を聞きますが、本当にそうだと実感しました。

それからです。世界が180度変わりました。

子ども、赤ちゃん、大好きになりました。

子育てに奮闘している時、ふと、友人が勧めてくれた『ちいさなあなたへ』を思い出し、本棚から引っ張り出しました。本を読んでいくうちに、「私、本に泣いてしまう人間だったかなー」と思いながら涙が勝手に溢れていました。

出産したときのこと、自分のことを育ててくれた父、母のこと。

この本は、いのちの誕生だけでなく、女の子が成長し、やがて母となり、そして歳を重ねていく―。

ひとつの人生の流れを描いた絵本です。

■そして、10歳になった「ちいさなあなた」

私の太ももに掴まり、掴まり立ちをした瞬間。

「ママー?てってー」と言い、差し出した小さな手。

食べ物をいっぱい詰め込んだぷくぷくのほっぺ。

全てが愛おしいです。

それは今でも変わりません。

そんな娘も今年で10歳になりました。

走るのが大好きな女の子で、今も私の隣にいます。

少しずつ大きくなっていくその手を見ながらときどき思います。

あの日、初めて抱いた「ちいさなあなた」は、今も私にとって、かえがえのない「ちいさなあなた」です。



Topics 01 ― 安心を届けるために、病棟でインカムの試験導入を開始



みなさんにより安心・快適な療養環境をお届けするため、スタッフ間の連絡ツール「インカム」を導入しました。

◆3つの変化
- 他のスタッフの状況を把握しやすくなり、応援協力がしやすくなった
- 病棟全体での情報共有がしやすくなった
- スタッフを探す移動が減った

装着中もお気軽にお声がけください。

Topics 02 ― 未来の看護師を育む
～実習校からも高評価！指導の舞台裏と温かな想い～

当院の看護学生実習は、実習校や学生の皆さんから「親身で学びが深い」と高い評価をいただいています。現場では、どのような指導が行われているのか、伺いました。

- 前身の病院時代を含めて100年の歴史と実績
- チーム全体でサポートする体制
- 実践力を高める工夫

Our Teams Voices　～Caring Hearts, Guiding Hands～

指導者としての心構え

「『学生』ではなく一人の人として向き合い、自分の頭で考え動けるよう導くのが私たちの教育です。指導する職員も共に成長しながら、次世代を温かく育む病院を目指しています。」

（実習指導者 谷口副看護師長）

実習での感動が入職の決め手に

「実習でほぼ全病棟を回りましたが、ここは学生を『スタッフの一員』のように大切にしてくれて感動しました！ミスしても責めず受け止めてくれる先輩ばかりの温かい病院だからこそ、早く育って恩返ししたいです。」

（1年目の 野口さん）

学生の不安に寄り添う指導

「学生時代の病棟実習ってすごく記憶に残るんですよね。だから学生さんや新人が失敗や不安で縮こまらないよう、スタッフ全員で声をかけています。誰も責めない、相談しやすい空気感を一番大切にしています！」

（3年目の 大和さん）



New Face!



皆様の支えになれるよう頑張ってまいります。お気軽にご相談ください。

8-11月の短期間ですが、中部の子どもたちに貢献できるよう努めてまいります。よろしくお願い致します。

産婦人科医　牧尾 悟

小児科医　熊﨑 健介

～お知らせ～

Coming soon

令和８年度鳥取県がんフォーラム
「がんになっても安心して暮らす　～病院・地域の支えを知ろう～」

【開催日時】 令和９年３月６日（土） 午後１時３０分 から 午後４時
【会　　場】 倉吉交流プラザ２階視聴覚ホール （鳥取県倉吉市駄経寺187-1）
【対 象 者】 地域住民の方、定員１２０名、参加費無料、手話通訳あり
【内　　容】 （1） 一般演題 5題
（2） 特別講演 ぽかぽか在宅ケアクリニック 院長 濵上 知宏氏



公式LINE

公式LINEリニューアル

もっと使いやすく、もっと身近に。
トーク画面下のメニューを押すだけで、ホームページの知りたい情報へひとっ飛び！
給食メニューをご家庭でも楽しめる栄養士監修レシピも大公開♫
「今日の晩御飯、何にしよう？」
そんなお悩みのお手伝いができるよう、夕方17時にお届けします♫



公式Instagram

Instagramで更新中～

幸せのおすそ分けをお届けします！

～可愛い赤ちゃんたちの
退院時のスマイル～

@KOUSEIBABY2024

鳥取県立厚生病院

Tottori Prefectural Kousei Hospital
〒682-0804
鳥取県倉吉市東昭和町150
TEL(0858)22-8181(代)
FAX(0858)22-1350
http://www.pref.tottori.lg.jp/kouseibyouin/

編集・写真
米原 裕美子（広報担当）
朝倉 顕一　（中央放射線室）
スペシャルサンクス
山根 香里　（患者支援・地域連携センター）
倉本 知子　（経営課）